

Not-God

『アルコールリクス・アノニマスの歴史』

Ernest Kurtz (アーネスト・カーツ)

第六章 成熟にともなう責任

1955年－1971年

有限だからこそ生まれるAAの全体性

Presented by
なかやま ひいらぎ

1

はじめに

第六章の構成

- ビル・ウィルソンという**カリスマの引退**
 - その後の彼の関心がどこへ向かったか・引退後のAAとの関わり
- AAに対する**批判に向き合う**
 - **AAのメンバーにしか関心が無い**
 - **このカルト化は現在の日本のAAでも起きているのでは？**
- 一体性とは
 - 社会化＝「喜ばしい多元主義」（異なる人たちと喜んで共存する）

2

ビル・ウィルソンというカリスマの引退

(3)

ビル・Wというカリスマの引退①

Not-God225

- 1955年7月3日「成年に達する」大会 ビル・Wのリーダー引退
 - 1971年に亡くなるまで16年間「共同創始者の長寿」
- 彼のカリスマ的権威がプラスに働いた面
 - 彼がAAの開かれた雰囲気、シンプルさ、そして寛容を強化した
- マイナスに働いた面
 - 評議会は真の自立性をもった自己更新できる権威をうまく発展させることができなかった

「リーダーシップ」という言葉にすら抵抗がある集団としてのAA

(4)

ビル・Wというカリスマの引退②

- ビルがAAがついていけない領域へ進んでいくことによって、限定つきではあったが、彼からの自立を進めることができた。
 - 常任理事の再編という責任を引き継いだ
 - ようやくその根底にある有限さを受けとめられるようになった
 - 「アルコール以外の問題」や向精神薬の問題についてAAが取るべき態度

当然「成年に達する」では扱っていない

(5)

ビル・Wというカリスマの引退③

- 常任理事会はビル・Wの多くの活動のなかの三つの領域について、注意深く人びとの目からかくまった
 - ウィルソンの**降霊術**（スピリチュアリズム）への興味、
 - 彼の**LSD実験**
 - 彼が**ビタミンB3(ナイアシン)療法を宣伝**したこと
- この三つの領域があまり理解されていなかったことは、AA共同体がもつ限界を示していた

(6)

降霊術(スピリチュアリズム) ①

Not-God 227

- **心霊主義 Spiritualism** 肉体が消滅しても霊魂は存在し、現世の人間が死者の霊魂と交信できるという思想—**降霊術**
 - 1940年代半ばから、ビル・Wの信仰に影響を与えるようになった
- 1948年～
哲学者で神秘主義者**ジェラルド・ハード**との交友
 - 心霊現象研究協会の理事
 - ビルとハードの間は1948-54年に往復書簡



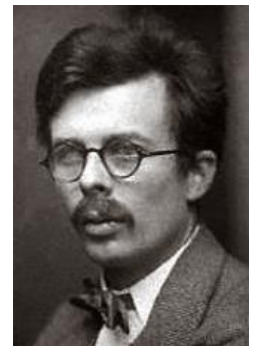
Gerald Heard (1889-1971)

(7)

降霊術(スピリチュアリズム) ②

Not-God 227

- **オルダス・ハクスリー** イギリスの科学者の家系出身の小説家
 - ディストピアSF小説『すばらしい新世界』1932
- 降霊術
 - ビルはハクスリーと一緒に実験をし、降霊術に没頭
 - ビルは**霊的なもの the spiritual**が存在する証拠から、ハイヤー・パワーが存在する証拠だと確信したが、その確信を公表したり、AAに押しついたりしなかった
- それはなぜか・・・



Aldous Leonard Huxley 1894-1963

(8)

降霊術(スピリチュアリズム) ③

Not-God 227

- なぜ彼は降霊術から得られた確信をAAに押しつけなかったのか
 1. 彼は、アルコールリズムからの救済に必要な信仰は、まさに信仰でなければならず、その定義上、不十分な証拠にもとづいた**知性が「底をつく(=敗北する)」体験**によるものでなければならぬと信じていたからである (自分のなかの道徳や善意が敗北する必要性)
 2. つまり降霊術によって得られる「神の实在の証拠」は、回復に必要な信仰を得るのには不十分
 3. むしろアルコールには**自己の万能感が壊れる体験が必要**だと考えていた →がんばれば何とかなるという幻想の崩壊

(9)

LSD実験

Not-God 228

- **霊的な病い**とみる理解と**精神の病い**とみる理解の橋渡し、という意図
- **LSD** (リセルグ酸ジエチルアミド) という向精神薬 (幻覚作用)
 - アルコホーリックは神の超越性 **transcendence** を化学的に経験しようとするが、アルコールという不適切な薬物を使ってしまった
 - より適切な**化学物質で超越的経験をつくり出せる**なら、アルコールに対する強迫観念が取り除かれるのでは・・・という仮説 (ユング派の思想に似ている)
 - 霊的な超越を求める人間心理の探究が、身体に効く化学物質で満足させられるとしたら・・・身体・精神・霊的という三側面を持った病気である証明になる
 - 彼の興味の中心は、「AAプログラムを身につける」ことがうまくできない人たちにとって、LSD活用が効果的な補助となる可能性

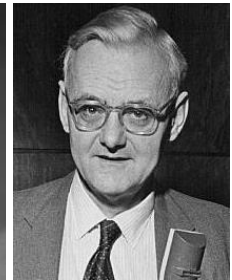
(10)

ビタミンB3療法 ①

- **ビタミンB3**（別名**ナイアシン**もしくは**ニコチン酸**）
- **エイブラム・ホッファー**博士、**ハンフリー・オズモンド**博士
 - LSD実験を一緒にやったドクターたち
 - アデレノクロム仮説
 - 神経毒性があり統合失調症の原因説
 - **メガビタミン療法** B3 + C大量投与
 - 1970年代には効果が否定された



Abram Hoffer



Humphry Osmond

(11)

ビタミンB3療法 ②

- 大量に投与する（メガビタミン療法）：
統合失調症でアルコールリズムもある患者にとくに効果がある
- 酒をやめたいけれどもAAプログラムを受けとめるには病気が進みすぎている人々のために
 - 医者たちにこの療法の効果を確認する努力をしてほしいと説得した
- ビルのB3療法への没頭は「外部の問題には意見をもたない」という伝統のあるAAにとって、脅威となった

(12)

ウィルソンの関心 ①

- ビルの「プログラムを身につけられない」人たちへの関心
 - 「アルコール以外の問題」をもつメンバー候補がその問題ゆえにAAの「シンプルなプログラム」を理解できない、あるいは近づくことさえできない人たちをどうするかという課題
 - これらは「外部の問題」にかぎりなく近づき、「公の論争に巻き込まれる」危険が大きくなった
 - AAでは工夫を重ね・・・三つのレガシーに専念すべきその**深いところにある本質的な限界**を意識するようになった

(13)

ウィルソンの関心 ②

- ビルがもっとも関心をもっていたのは、AAが責任を感じる対象として、**AA共同体の外側にとどまりながらも、助けが必要な人たちを視野に入れること**
 - 指導者から退いて状況を客観的にみられる機会が増したためであろう
- アルコホーリクの「未熟さ」が、プログラムを必要としている多くの人たちにとって、AAを試してみる妨げになっているのでは、とウィルソンは直感した

(14)

常任理事会構成比

(15)

一度はこの問題から身を引いた

Not-God231-232

- 1955年以降、ビルは常任理事構成比を変える動きから身を引いた
 - 「これから開かれる評議会では、常任理事構成比について私は何も発言しない。私は本当にセントルイスの大会で引退した」 1958年
- しかし1959年
 - 「いまだに過半数の理事をを指名して自分たちの運営にあたらせることを拒否しているのは、やる気があるのか疑問に思う」
 - 「信頼よりも怖れによって物事を決めているようだ」

(16)

ティーボウ博士の反対

- 博士は、ウィルソンが提案する常任理事会構成比の改革案に必ず反対すると書いていた
 - むしろこの理由こそ、ウィルソンが彼の計画を進める必要があるというはっきりとした理由だった
- 「ほとんどのAAメンバーは成長する必要にあまり乗り気でない」
 - 「若者たちの多くは自分たちが成長したと強く思いこみがちだ。問題は、彼らがまだまだ学ぶことがたくさんあるのに、それを自覚していない点だ」

(17)

4年間続いた論争

- この間、ウィルソンはAAの常任理事たちに「責任」の意味について熟考するよう少しずつ説得を強めた
 - とくに強調したのは、AAのフェロシップの外側にいる、まだプログラムが必要なはずの人たちへの責任についてだった
- 1964年後半に、ようやくティーボウ博士が同意するようになった

(18)

ティーボーの忠告

- 「若者ならだれであれ、大人になった気分になって大きな態度をとるが、彼が本当に成熟するまでには学ぶことがたくさんあるのだ……成熟した人は自立していると主張したりしない。人生を一人だけでなんとかしなくてもよいと気づき、満ち足りているからだ」
- ビルの反論「経験ゆたかなAAメンバーならほぼ誰でも、私たちが未熟な若者だということに同意するでしょうし、そこに自分自身を含めるでしょう。この未熟さから成長し抜け出して、私たちが大人の責任をもてるようになることがいつでも大目標でした。飲まない生活は出発点にすぎません」

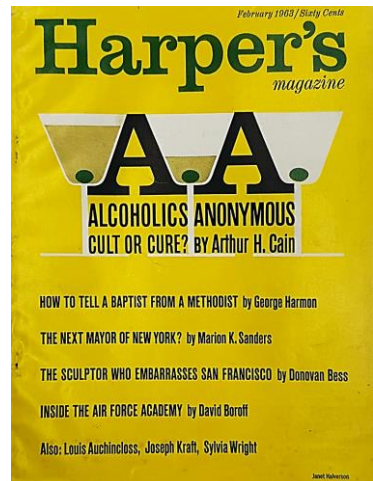
(19)

常任理事会の構成の改革

- 1966年、ようやく切望されていたAA常任理事会の構成の改革がなされた。
 - 「1966年ゼネラルサービス常任理事会の構成比が改められ、常任理事会の三分の二をアルコールクとすることになった。これは歴史的な瞬間で、AAという共同体がAAに関わるあらゆるふるまいについて、将来にわたって責任を引き受けたのである」

(20)

AAに対する批判に向き合う



(21)

雑誌に掲載されたAA批判記事

Not-God 236

- Arthur H. Cain, “Alcoholics Anonymous: cult or cure” *Harper's* 1963年2月号（アーサー・C・ケイン「アルコールリクス・アノニマスはカルトか治療か？」）
- Jerome Ellison, “Alcoholics Anonymous: Dangers of Success” *The Nation* 1964年（ジェローム・エリソン「アルコールリクス・アノニマス成功の危険」）
- Arthur H. Cain, “Alcoholics Can Be Cured — Despite A.A.” *Saturday Evening Post* 1965年9月19日（ケイン「アルコールリクはAAなしでも回復可能」）

(22)

批判に対するウィルソンの反応

- AA自体は、もちろんその伝統の十に忠実で、自分たちについてのものであっても、公的な弁護や公に論争に加わることはなかった。実際、彼らの愛するAAが無神経に扱われていることに対し抗議する仲間に対し、ウィルソン自身は、**伝統十を遵守**〔して論争を避ける〕のみならず、**批判のなかにある一抹の真実を見つける**よう提案した。

(23)

批判のよりどころとなった論文

- 少し先に出版された著名な精神科医の**モリス・E・シャフェズ**博士と社会学者の**ハロルド・W・デモネ・ジュニア**の *Alcoholism and Society* (アルコールリズムと社会, 1962) のAAに関するセクション
 - 総じてAAに共感的で、伝統的な医学分野の欠点をAAの成功が証明していると述べた
 - 精神医学界のAAに対するおなじみの批判を追認したが、AAを容赦なく攻撃したりはしなかった

(24)

シャフスとデモネ 1962 の結論①

- AAを機能させている「社会心理学的しくみ」
 1. 「彼らの強迫的、ほとんど執念深いといえるほどの注意を、AAの生き方に向け、それにより強迫的欲求 compulsion のしくみを建設的に活用するよう求める」
 2. 「AAは、私たち中流階級の生き方に戻る道を示す。おそらくAAの本質は、私たちが深く根を張る『プロテスタントの倫理』に由来している
 3. 「もっとも印象的な点」は「AAの宗教集団のような側面である」

(25)

シャフスとデモネ 1962 の結論②

- AAを機能させている「社会心理学的しくみ」
 4. 「意識的に神に向きあう、もしくは他者に感情的に献身することには、自分が人格をもった存在であるという一定の感覚が必要となる」
- これらすべては以前にも指摘されたことであり、とくにウィルソン自身が有用な真実と思って広めさえしていた。
- だが、最後の批判はAAの自己イメージを直接脅かすものであり、ほかのどの批判よりも受け入れがたいものだった
 - 「私たちの意見では、じつは、AAはアルコールクというものには興味はなく、AAに関わる者だけに関心をもっている」

(26)

ケインの批判

- AAは独善的な**カルト集団**となった：
 - その支部ではしばしば酒のない生活が**AAの奴隷**に転じてしまう。その**狭苦しい世界観**のせいで、本来治るはずの何千人もの人たちの治癒をAAは妨げる。
- ケインの批判も、エリソンの批判も「……となった (has become)」という表現で、**ほぼ想像上のかつての黄金時代があったこと**にして、**AAは古き良き時代と本来の目的に戻るべきだと主張した。**

二人の批判には真実も含まれていたが、彼らが強く押しつけてくるようには（少なくともビルが生きている間は）AAは変化しなかった

(27)

カルト化への批判

- ここで言う**カルト化**とは：
 - **自分たちにしか関心がない**（AAに関心を持ってくれる人に対してしか関心をもたない）・・・カルトの特性の一つ
- 私たちが「仲間」と呼ぶ対象はなにか？
 - AAメンバーだけなのか？
 - **AAに関心を持たないアルコールクも含むのか？**
 - ロイ神父『仲間になってくれてありがとう』の「仲間」とは

現在の日本のAAもカルト化しているのではないだろうか？

(28)

一体性とは

(29)

ビル・ウィルソンの晩年

Not-God 240

- ビル・ウィルソンの晩年—多くの意味でAAの誕生期といえる—は静かだった。
- 肺気腫がひどくなり、彼が公に登場する機会は少なくなった。
 - 彼の書簡の数ですらごくわずかになった。
- **1970年 マイアミビーチでのAA35周年のコンベンション**
 - ビルは参加者たちの前に車椅子で現れ、参加者総立ちの拍手喝采を受けた。「演台に手をのばし、両手でつかまって」短いスピーチ。

(30)

一体性の宣言

ビル・ウィルソン 最後のスピーチ

「以下のことにAAの未来がかかっています。私たちが共通の福利を第一におくこと、そして私たちAAという共同体の一体性を守ること。私たちの命やこれからやってくる仲間の命が、**AAの一体性**にかかっているのです」

- この大会のテーマは「一体性の宣言」
 - これは意義深い、**AAの限界を自覚させる**テーマ
- **いかにAAの一体性 unity を保っていくか oneness**

(31)

一体性というテーマ ①

- 一つであること oneness
- 一体性は**目的が一つ**であることから生まれ、**必然的に二つの結果**をもたらす
 1. AAはその努力を...共通の一つの問題 アルコホリズムのみに向ける
 2. 「**自分だけが特別**」、つまりほかのアルコホーリック〔と自分〕との**違い**を主張するようなことは何であれ、彼らのソブラエティを脅かす

(32)

一体性というテーマ ②

- より深い意味では、アルコールイクが「神であるかのようにふるまうのをやめる」必要はAAの思想の核にあり、自分だけは特別だと主張することは、「アルコールイクの問題のおもと」であったからだ
- AAのプログラムが効果的なのは、アルコールイクの**自分だけは特別だという主張を、小さくしぼませる**からだった。
- しらふのアルコールイクですら、ずっとアルコールイクだ

(33)

一体性というテーマ ③

- AAの成功の問題は、成功したがゆえに自分たちを「特別だ」と考える一部の人が、
 - 自分たちの特定のAAの表現に**門戸を狭めよう**とする
 - プログラムと共同体全体として**より広い能力を主張**するのどちらかの圧力をかけたとき、**どのように一体性を保つか**だった

(34)

一体性というテーマ ④

- 一体性と「目的が一つであること」が深く結びついていることに対する**二つの脅威**
 - AA共同体が自らを「無名の（アノニマス）」と主張するのは適切か
 - アルコホーリクスをどこまで広げて解釈できるか
- 解釈を巡って議論が続いた

(35)

特別グループ(ダブルクローズド)

- 特定のメンバーたちが自分たちだけの**特別グループ**をつくらうとする
 - AAグループであると標榜しながらも、**アルコール以外**の何らかの**要素が共通している人たちだけに参加が制限されているグループ**
- ① **職業**：医師のグループや牧師、神父のグループ、警察官たちは、別々に集まりたいという希望
 - 確実なアノニミティーこれから参加しようとする新しい仲間にとって助けになる

(36)

特別グループ(ダブルクローズド)

Not-God 242

- ② **宗教**：特定の宗教を共有する仲間たち
 - AAプログラムが宗教的すぎると不信感を抱くのではと懸念
 - 十分に自分の霊的な信条を分かち合えない
 - 同じ宗教観を分かちあう仲間となら、AAの生き方の「スピリチュアルな深み」をともに探究していける
- 12の伝統によるAAグループの定義を考えると、このような「特別グループ」の成立を阻む壁はないようにみえた・・・

(37)

特別グループ(ダブルクローズド)

Not-God 242

- しかし、参加に制限を課さないミーティングを行うグループしか、ニューヨークのゼネラルサービスオフィス、地域のセントラルオフィスは、リストに載せなかった。
- **参加に何らかの規制が設けられているグループは、AAグループではない**
- ダブルクローズドは（正式な）AAとは認められなかった

(38)

特別グループ(ダブルクローズド)

Not-God 243-244

- 比較的短期間のあいだに、ほぼすべてのAAメンバーがAAプログラムの哲学と精神を吸収し、その結果、そのような**特別グループ**は**本当のAAではない**、と彼ら自身が主張するようになった
- この**ミーティング**は「本物のAAではない」と、やってきた新参者候補に強調するのだった
- **自分も同じだと感じる**こと identification のほうが、外面的なこと〔特別ミーティングのテーマとなっている立場や課題のこと〕よりも重要だと強調した

(39)

特別グループ(ダブルクローズド)

Not-God 244

- このほかのメンバーたちは、**ふつうの、本当の**AAミーティングに向かうように、これらの新参者たちを促すのだった
- 個別の事情をあれこれ言わずにアルコールクであることをストレートに認めること → **底突きの受容**
- 自分たちが何をして収入を得ていたかにふれずに自分の話をできるようになったこと → それとステップ2を合わせて、**AAプログラムが習得されている**とみなされた

(40)

注釈) 女性クローズドなどの登場

- 1971年に *Not-God*が執筆されたときには存在しなかった
- これらのグループは集団療法に近い実践をしながら「AA」と名乗るほかの多くの小グループと格別の差はない
- 訪問者（ビジター）を排除したミーティングは一つもなかった。「ふつうのミーティング」のほうが「落ち着ける」かもしれない、と提案されるが、そのようなミーティングが近くになれば、ミーティングにそのままとどまって問題ない。

昨今のAAが抱える課題の一つとみなされている

(41)

「肌の色」問題（人種差別）①

- AAはこれについて手厳しい批判を受けていた
 - AAはミーティング一覧には、「白人のみ」や「黒人のみ」などとはけっして記載しない。しかし、ミーティング場がある地域によってそのどちらかだと理解がなされるなら、それが現実である。
- ビル・ウィルソンの応答
 - ① まず、法律に従うこと
 - ② AAをどのようなコミュニティからも浮いてしまわないようにする
「私たちはすでに十分すぎるほど社会のはずれ者なのだから」
 - ③ そして「プログラムを生きる」こと

(42)

「肌の色」問題（人種差別）②

- ビル・ウィルソンの応答
 - ③ そして**プログラムを生きること**
- 自分には参加できないミーティングがあるということ
 - これは「自分に変えられないこと」の一つなのだ
 - AAの歴史と伝統のAA的な理解に添うなら、排除されたメンバーたちは、ひょっとしたら、まさに排除されたという事実をとおして、彼らのハイヤーパワーから**必要なグループを新たにつくるよう導かれたのではないだろうか**

(43)

より深刻な問題

- 特別グループ（**ダブルクローズド**）や**人種差別**の問題は、唯一の問題でも、一部のAAメンバーがこだわった〔自分だけが特別〕という感覚をめぐる**主要な問題でもなかった**。
- **より深刻な脅威**が生じたのは、以下のような状況からだった
 - アルコホリズム以外にも問題を抱えるメンバーたちが「彼らのプログラム」を、「**そのほかの問題**」だけをもった人たちにも**広げようとする動き**
 - アルコールに加えて「**薬物**」にも**依存している者のみに**、彼らの「AA」を限定しようとしていた
 - 1960年代初期に薬物の使用が**いっそう増加した影響**で再び関心は強まった

(44)

ビルの回答 ①

- この組織の問題というよりも**根底から哲学的な問題**
- ビル：多くの手紙と一つの記事「**アルコール以外の問題**」
 - ① 「アルコールでない者をAAメンバーにすることはまったく**不可能**であると学んできた」
 - ② 「AAメンバーが集まっても、ソブラエティ以外の何らかの特別な目的のためのグループというのは、AAグループではない」
- AAが直接に、AAの名でそれを行う必要はない

(45)

ビルの回答 ②

- 個々の手紙でも、ウィルソンは二つの点を提起した
 - ① **AAには限界がある**
 - ② そのため、アルコールクス・アノニマスという名前は**ソブラエティを望むアルコールクのみに限られるべき**である
- AAの**名前**に込められた、メンバーの限定を保つ意志
- AAの本質といえるその**一体性**は・・・**AAがAA自身の限界を受け入れること**、いや受け入れることそのものといってもよい

(46)

全体性①

AAの名前に込められた、
メンバーの限定を保とうという考え

Not-God 247

- AAプログラムが**メンバーに対してあなた方は神ではない**と厳しく言い渡しているのと同様に、**AAは共同体**（仲間の集まり）であって**神ではない**とAA自身に厳しく当てはめている
- AAはまさに**AAという存在の限界を受け入れる**ことで、AAの**全体性を得る**という救いを生み出した

AAが限界を受け入れる模範であり続ける努力をやめてしまったら、それはなお「名前のないアルコールクたち（アルコールクス・アノニマス）」でいられるだろうか。AA共同体がプログラムを生きることをやめてしまったら、プログラムを保ち続けることができるだろうか。

(47)

全体性②

Not-God 248

「アルコールクス・アノニマス」の名前が適切だということを第一に示すのは、AAが弱きと限界を宣言しているということにある。「アルコールク」とは自身の飲酒をコントロールできなかった人であり、AAのなかで無名になること（アノニミティ）は、このような状態におかれた弱さを効果的に思い出させる役割を果たした。この弱さの宣言—AA共同体の**唯一だが輝かしい「成功」の源**によって、**弱さからこそ強さが生まれ、無能から能力が生まれ、そして限界から自分が何ものかの自覚が生まれる**ということが、**第一の真実**であると実証された。

あなたと私たちが共通して弱きをもっていること、そしてそれをお互いの強みとしてももっていることを、認めてはどうでしょうか。

(48)

社会化 = 違う人たちと共存する

- 飲み続けているアルコールクの根本的な欠点は**社会性の欠如** defective socialization である。
- AAのなかで生じる変化も**社会化** socialization の過程
- 成功は、**喜んで違う人たちと共存する** (joyous pluralism = 喜ばしい多元主義) の理論と実践を、自分は神ではない有限な存在だと自覚している人たちのあいだで関係を育てていく鍵として、AAがそのメンバーにくり返し教え込むことにかかっている

(49)

「喜ばしい多元主義」①

- 喜んで違う人たちと共存する——AAの誕生の瞬間からこの概念はAAに浸透していた
- ジェームズ、OG、エビー・T、ユング、シルクワース—多様な「源泉」のなかに多元性が潜んでいた
- ウィルソンとスミス：「違う状況であれば10秒といっしょに過ごすことはなかったであろう二人」

お互いに相手に与え、相手をとおして多くの人たちに差し上げることのできるものが、まさにお互いの「違い」のなかにあるという敬意だった。

(50)

「喜ばしい多元主義」②

- ハンク・P+ジム・B：フィッツ・M
- T・ヘンリー・ウィリアムズ+ヘンリエッタ・セイバーリング：クラレンス・S
- ジャック・アレクサンダー、エドワード・ダウリング神父
- 創始者二人は・・・それぞれが争いを越えた高さに身をおき・・・「違い」を見すえた

「違い」は、害をもたらす破壊的なものではなく、豊かに実りをもたらすもので、「よいもの」

(51)

「喜ばしい多元主義」③

- ビル・ウィルソンお気に入りの二つのイメージ
- 「私の父の家には住むところがたくさんある」ヨハネによる福音書 14:2 —どんな人にも神が居場所を用意してくれる
 - 違いは善いものである
 - 「私の祖父はよく、『世界をつくるにはいろんな種類の人たちが必要だ』とよく言っていた」
 - 一人の人間が万人のためにあらゆる役を引き受けるわけにはいかない

(52)

「喜ばしい多元主義」④

- ウィルソンお気に入りの『天路歷程』のイメージ
 - ジョン・バニヤン (1628-1688) による宗教的な寓意物語
- 人間は限界ある存在で、その**限界ゆえに、他者が必要**となる
 - もし誰もが「巡礼者」であったなら、誰も「到着」しなかつたらう
 - **上昇する進歩 “progress”** とともに、**下降する進歩 “progression”** も、ぜひとも必要なもの
 - どこまでも成長していくのではなく、自分の限界や惨めさを受け入れていくことの必要性

(53)

終わりに

- ドクター・ボブの言葉を引用して、

『正直さのおかげで私たちは酒のない生活を始められるが、
寛容さのおかげで酒のない生活を続けられる』

Honesty gets us sober but tolerance keeps us sober.

(54)

第二部のご案内

GA
コー
ナー
ストー
ン

特別企画
『アルコールクス・アノニマスの歴史』を学ぶ
～「第二部 解釈」～(1)

日時 2025年6月29日(日) 21:00～22:30
内容 はじめに
第七章 米国史のより広い文脈で
開催場所 オンライン開催 (Zoom)
アクセス ID 828 5563 2409
PW 1935

<https://www.gacornerstone.org>
contact@gacornerstone.org

詳細はこちらから



<https://www.gacornerstone.org/events-202506/>

ご静聴、ありがとうございました。



from *Back to Basics – AA Beginners Meeting*